

チェリストの羽川真介氏と妻の美千子から、翌週彼のリサイタルで演奏する、ベートーヴェンのチェロ・ソナタ第3番イ長調 op. 69 のリハーサルを聴いてほしいと言われ、2時間ほど、この名曲に没頭しながら聴いた。

この曲は、ヴァイオリン・ソナタ全10曲を凌ぐベートーヴェン中期の充実した傑作なので、思わず昂奮してしまった。

その夜、眠れなかったわけではないが、(翌朝の寝起きが爽快だったので)何か、一晩中頭の片隅でこの名曲中の名曲が鳴り響いていたような記憶がある。

その翌日、N響アワーで、ズービン・メータの振るマーラーの交響曲 第1番 二長調「巨人」を聴いた。メータの棒は明快そのもので本当に解り易かった。演奏も乱れなくすっきりしたものだだった。

マーラーの音楽は、ワーグナーのそれと同様に、耳にこびりつき、いつまでも我々を追い続けるものなので、ベートーヴェンと比較して、数倍アクの強いものだ。この後、一睡もできないのではないかと懸念していたが、期待(?!)に反し悩まされずに熟睡できた。あまりにアッケなかったので、その理由を考えたが、強いて言えば演奏が端正ですっきりしていたからだと思う。

マーラーの音楽には、訴えや、嘆きが潜在する。また、自己否定を通り越し、自己嘲笑にも似たアイロニーが強い。この主張と比較は少し的外れかもしれないが、朝鮮半島の人達の「恨(ハン)」と相通ずるものがあるのかもしれない。

我々日本人には、ユダヤ人、特に、アシュケナージユダヤ人達の、自己への不満、他人に対しての不満、世間一般に対しての恒久的な不満の精神は容易に理解できないのかもしれない。そのため我々が演奏するとその「アク」が聞こえなくなってしまうのだろう。

9月13日、マン・レイの展覧会の最終日に足を運んだ。彼は米国フィラデルフィア生まれだが、両親はロシア出身のアシュケナージユダヤ人で、本名をラドニツキーといった。私の最も好きな画家ライオネル・ファイニンガーも米国生まれのドイツ系ユダヤ人だが、彼の作品には「聖なるもの」があると思う。マン・レイは我々弦楽器奏者には、女性の背中に f 字孔を二つ描いたモンタージュ写真でなじみがあるが、私にはドローイングの線の繊細な動きが印象に残った。ゲルマン系のアーティストと同様に色彩感覚に見るべきものは少ないが、造形的な線はとても芸術的だと感じた。

この展覧会はこの後、関西に移動するという事なので、チャンスがあればもう一度行ってみたい。

その夜、浜離宮朝日ホールで、ドイツ人のチェリストアルバン・ゲルハルトの無伴奏リサイタルを聴いた。印象を一言で表現すると、技術（特にボーイング）は最高レベルだが、音楽的表現が散漫だ。よく研究されていて、種々の工夫も成されているが、音楽の本質がつかめていないので、表現がハッキリしない。バッハの第1番、リゲティ、バッハの第6番、休憩の後、コダーイというプログラムだったが、全体にヴィブラートが細かくかかり過ぎているため、右手では大切な音が強調されていても、ヴィブラートは大事な音を選んでかけられていないので、焦点がボケてしまっている。

今年、40歳にもなる人に洞察力を磨いて欲しいとか、本質を見極めることを期待したい、というのは適切ではないかもしれない。しかし、レベルは異なっても、自分が今70歳で、芸術的な高さへの努力と更に本質へ肉迫しようと向上を目指していることを考えると、あながち、間違った望みではないかもしれない。

しかし、ヴィブラートが麻薬たり得る事を改めて実感した次第である。